

「保育内容（言葉）の指導法」における 「絵本の読み聞かせ」の模擬保育に関する一考察

A Study on Simulated Childcare with "Picture Book Storytelling" in a Class "Teaching Method for Childcare Content (Words)"

中 野 広 大^{*1}

Kodai NAKANO

Abstract

The main purpose of this study is to clarify the viewpoints of students' observations during a simulated childcare with "picture book storytelling." For this purpose, university students played the role of children in a simulated childcare in the "Teaching Method of Childcare Content (Words)." The students were asked to fill in their comments on the observation record sheet, and the results were analyzed by frequency of occurrence and co-occurrence network analysis. As a result, it became clear that the students observed the simulated childcare from the following six perspectives: 1) the viewpoint of general consideration of picture book storytelling, 2) the viewpoint of voice, 3) the viewpoint of pointing, 4) the viewpoint of page-turning, 5) the viewpoint of introduction, and 6) the viewpoint of children's participation.

This study was an analysis using observation record sheets at the beginning of instruction. Therefore, it is necessary to further research how the observation perspectives will change as students deepen their learning about the teaching methods of childcare content.

Keywords: Childcare content (Words), Picture book, Picture book storytelling,
simulated childcare, Training childcare workers

1. はじめに

本研究では、保育者養成課程における保育内容と方法の学習を果たす模擬保育について焦点を当て、その切り口として「絵本の読み聞かせ」を取り上げる。「絵本」や「絵本の読み聞かせ」は、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』において保育内容の必須事項として取り上げられているものであり、保育者^{*2}を志す大学生が、保育における位置づけや保育内容としての構想の仕方や展開の方法、実践のための知識と技術を学ぶことは必要不可欠である。したがって本研究では、保育内容の領域「言葉」における「絵本」や「絵本の読み聞かせ」について保育者養成課程に求められることを、先行研究や参考文献から整理するとともに、筆者が担当する授業科目「保育内容（言葉）の指導法」で実施している「絵本の読み聞かせ」の模擬保育について、学生がどのような学びの視点で行っているのか、観察記録シートへの学生の記述を分析することによって、明らかにしたい。

2. 保育における「絵本」及び「絵本の読み聞かせ」の位置づけ

（１）絵本に関連する「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

所管する省庁は異なるが、保育所、認定こども園及び幼稚園は全て幼児教育を行う施設であり、「育

*1 くらしき作陽大学 子ども教育学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

*2 保育所においては「保育士」が、認定こども園においては「保育教諭」が、そして幼稚園においては「教師」がその役割を担う。本研究においては、保育士、保育教諭及び教師をまとめて「保育者」と表記し、論考する。

みたい資質・能力」や、それらが育まれた小学校就学時の具体的な姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は共通している。ここでは『保育所保育指針』を例にとり、絵本に関連する部分を抜粋する。

『保育所保育指針』 第1章 総則

4. 幼児教育を行う施設として共有すべき事項

(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

ケ 言葉による伝え合い

保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

松居（2003）が指摘する通り、絵本は優れた文化財であり、乳幼児に気づきや喜びを与えるものである。絵本に親しむこと自体が、教育的価値を有していると捉えることができる。その上で、保育においては、絵本に親しむことだけにとどまらず、これを起点として言葉による伝え合いをもたらしなど、子どもの生活や遊びをより豊かに展開させていくことが重要である。したがって、保育者養成課程においては、絵本を子どもに提示・提供するための知識や技術だけでなく、全体的な計画をふまえた上で、絵本を取り入れた保育活動の全体像を構想する力を育成することが求められる。

(2) 乳児保育における「絵本」及び「絵本の読み聞かせ」の位置づけ

乳児に関しても同様に、『保育所保育指針』から関連する部分を抜粋する。

『保育所保育指針』 第2章 保育の内容

1. 乳児保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

ウ 身近なものと関わり感性が育つ

(イ) 内容

- ①身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。
- ③保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。

乳児保育において、視点「身近なものと関わり感性が育つ」の中に絵本の表記が見られる。内容①から、保育者は、子どもの興味や好奇心を喚起する物的環境を整えることが求められ、その中の主要なものの一つとして絵本が位置づけられていることが把握される。したがって、保育者養成課程においては、乳児の発達過程に合わせた絵本の選び方や扱い方の学習が必要である。また、内容③から、保育者は子どもと共に絵本に親しむことが求められる。そのため、保育者は、発達過程に適合した絵本を選ぶことをはじめ、絵本を介して子どもと受容的かつ応答的に関わるための知識や技術を学ぶことが求められる。

(3) 1歳以上3歳未満児の保育における「絵本」及び「絵本の読み聞かせ」の位置づけ

1歳以上3歳未満児に関しても同様に、『保育所保育指針』から考察する。

『保育所保育指針』 第2章 保育の内容

2. 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

ウ 環境

（イ）内容

- ②玩具、絵本、遊具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。

エ 言葉

（ア）ねらい

- ③絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

（イ）内容

- ④絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。

1歳以上3歳未満児の保育において、領域「環境」及び「言葉」の中に絵本は位置づけられていることが分かる。領域「環境」の内容②から、乳児期の保育内容の視点「身近なものに関わり感性が育つ」に引き続き、子どもの遊びを豊かにする物的環境としての絵本の重要性が把握される。また、絵本はもとより、それらから遊びを楽しむことへ展開することが重要であり、絵本を起点とした展開性のある保育を構想することが必要であると言えよう。また、領域「言葉」の内容④から、保育者は、絵本などを通して子どもが言葉の音や響きに興味を持って、繰り返したり、模倣したくなったりして遊びにつながるように保育を構成する必要がある。物語を共有した子どもたちは、物語から発展した遊びを通して、気持ちを通わせる経験につながっていく。保育者養成課程においては、子どもが言葉の音や響きを楽しめるような絵本の選書や読み聞かせの表現技術の習得、また、遊びに発展していくような保育の構想などが求められる。

（4）3歳以上児の保育における「絵本」及び「絵本の読み聞かせ」の位置づけ

保育所も幼児教育を行う施設として位置づけられ、3歳以上児の保育内容は、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』ともに同様であるため、ここでも『保育所保育指針』から考察する。

『保育所保育指針』 第2章 保育の内容

2. 3歳以上児の保育に関わるねらい及び内容

（2）ねらい及び内容

エ 言葉

（ア）ねらい

- ③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。

（イ）内容

- ⑨絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。

（ウ）内容の取扱い

- ③絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。

- ④子どもが生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。

3歳以上児の保育において、領域「言葉」の中に絵本は位置づけられていることが分かる。『保育所保育指針解説』（厚生労働省，2018，pp.262-263）では、「楽しさを十分に味わうことができるよう、

題材や子どもの理解力などに配慮して選択し、子どもの多様な興味や関心に応じることが必要」また、子どもが言葉で表現することを楽しむために「日常生活の中で見たり、聞いたりしたこととその時に聞いた言葉とを重ね合わせながら、意味あるものとして言葉に出会わせていくことが望ましい」とされている。この点から、保育者は、子どもの発達段階や一人ひとりの興味や関心に応じて、相応しい絵本を選書していく必要があると考えられる。また、内容⑨から、子どもが絵本に親しんだり、想像する楽しさを味わったりするためには、保育者が絵本の内容や読み聞かせの目的、読み聞かせ前後の保育の展開、子どもの状況に合わせた多様な読み聞かせができることが重要である。そのため、保育者には「絵本の読み聞かせ」の知識や表現も必要となる。

3. 先行研究の概観

保育内容（言葉）の指導法における「絵本の読み聞かせ」に関する研究においては、滝浪（2022）が参考となる。滝浪（2022）は、幼稚園教員養成課程において、授業科目「保育内容指導法演習『言葉』」の中で、学生による絵本の読み聞かせを実施し、学生に振り返りを記述してもらい研究を行っている。学生の振り返りから得られた成果として「① 読み聞かせの意義や重要性を、読み聞かせの実演を通して、改めて理解することができたこと」、「② 自己のスキルの反省ができ、今後の自分の読み聞かせの技法（持ち方、めくり方など）を再確認できたこと」、「③ 演習を通して、自選するというきっかけによって、改めて選書の大切さに気付くことができたこと」の3つを挙げている。

続いて、山田（2017）の研究について概観する。学生を対象に絵本を読み聞かせてもらった体験や保育実習Ⅰ（保育所）での「絵本の読み聞かせ」の実施内容等のアンケートを実施している。その結果から、学生に対して「読み聞かせの技術的な方法や、絵本の選び方だけでなく、読み聞かせが齎す^{もたら}良い影響を理解できるような事前指導が重要」（p.42）と指摘している。また、保育実習Ⅰ（保育所）での絵本の選択理由について、内容を見て子どもが喜んでくれそうなものを選んでいる学生が半数近くで、行事や季節に合わせたものや子どもが普段好んで見ている絵本のシリーズなどは少数であり、「季節や行事、子どもの状態なども考慮に入れながら、適切な絵本を選択できる力を養うことが重要」（p.46）と指摘している。さらに、読み聞かせを実施した学生の半数以上が、絵本の持ち方や読み方、導入などの技術的な難しさを実感しており、模擬保育を通して、「保育者側の視点だけでなく、子ども側の視点で、読み聞かせてもらうことで、絵本を持つ手の位置や向き、絵の大きさなど、様々なことに気付くことができる」（p.46）と述べている。以上のことから、保育者養成課程での「絵本の読み聞かせ」指導の必要事項として「1. 絵本の魅力を深く味わう体験をする」「2. 絵本に対する知識を得る」「3. 読み聞かせの技術を身に付ける」「4. 絵本を子どもと一緒に楽しむ感性をもつ」を指摘している。とりわけ、先述の「4. 絵本を子どもと一緒に楽しむ感性をもつ」について、絵本を中心に子どもの遊びが展開されることがよくあり、子どもの思いに共感し、実現していくように一緒に考え、援助していくことにより、絵本の世界が広がっていくと指摘している。「絵本の読み聞かせ」の表現技術だけでなく、保育の中で絵本を通して子どもと一緒に楽しむという保育の構想に関する視点も持てるように指導する必要性について重要な示唆が得られている。

両者の研究の共通点として挙げられることは、学生が「絵本の読み聞かせ」を模擬保育や保育実習等で実践することによって、その意義や表現技法の難しさ、選書の大切さに気付いていることである。このことから、授業で「絵本の読み聞かせ」の模擬保育を取り入れることは、学生にとって貴重な学びの機会とも言える。

また、保育において感情の共有を促すための「絵本の読み聞かせ」の表現方法については浅野（2016）の研究が参考となる。絵本の読み聞かせを考察したり学習したりする際の視点として、「視覚的要素」と「聴覚的要素」の2つを挙げ、構造的な解明を試みている。視覚的要素とは主に、絵を活かすことであり、絵本の持ち方や支え方、めくり方が要点としている。また、読み手の表情や指さしなども視覚的要素として挙げている。聴覚的要素とは主に、言語表現に関する事項が多く、緩急強弱や抑揚をつけたり、言葉と言葉の間を取ったりすることなどを要点として挙げている。そして、保育者は多様

な実践方法を専門性として備え、読み聞かせの知識や技術とともに、実践力を高める必要性を指摘している。

ここで概観した先行研究では、「絵本の読み聞かせ」の模擬保育を行った学生の学びや、保育実習Ⅰ（保育所）における「絵本の読み聞かせ」の学生の実態からの考察、また、「絵本の読み聞かせ」の表現方法についての研究であった。しかし、「保育内容（言葉）の指導法」での「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における観察者の視点に関する調査はなされておらず、この研究を通して、模擬保育の実践者と観察者両者の学びについてさらに深めていく必要がある。

4. 本研究の目的

先行研究における課題より、本研究では「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における観察者の学びに焦点を当てる。本研究の目的は、2点ある。1点目は、観察記録シートの学生の記述を分析することで、「絵本の読み聞かせ」の模擬保育において、学生がどのような視点で学びや気づき等を得ているのかを明らかにすることである。2点目は、1点目の分析において明らかになった学生の学びの視点を踏まえて、今後どのような指導が必要であるか知見を得ることを目的とする。

5. 本研究における調査と方法

中国地方にある保育者養成を行う4年制大学において、筆者が担当している授業科目「保育内容（言葉）の指導法」の履修大学2年生2クラス80名（Aクラス44名、Bクラス36名）を対象に調査した。2022年4月、各学生による「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における観察記録シートの提出を求めた。この対象となった学生は、全員1年次に授業科目「保育内容（言葉）」を履修している。なお、「絵本の読み聞かせ」を行う際は、事前に、読み手が「対象とする子どもの年齢の設定」「読み聞かせが行われる状況」「読み聞かせのねらい」等を示した。聞き手は、子ども役となり、読み手による読み聞かせに反応を返すと共に、所定の様式による観察記録シートに記入をする。

この観察記録シートでは、保育者としての大学生が取り組む模擬保育の「絵本の読み聞かせ」について、聞き手の学生がどのような視点で模擬保育を見ているかを明らかにするために、気づきや学び、アドバイス等を記入してもらった。（模擬保育の観察については、子ども役となって参加することとした。）

本研究では、14人の学生が発表をし、観察記録シートの提出があった1,138件を有効回答として分析を行った。観察記録シートにおける学生の記述については、言葉の出現傾向や共起関係を探るため、計量テキスト分析ソフト「KH Coder」（樋口, 2014）を利用して分析を行った。

6. 結果及び考察

（1）出現回数からの考察

「学び・気づき・アドバイス等」のコメントのキーワードに出てくる上位50語について表1に示した。出現回数が最も多かったのは「声」（292回）であった。続いて、「絵本」（289回）、「思う」（282回）、「読む」（230回）、「子ども」（215回）となった。上位5位まではいずれも200回以上出現した。また、100回以上出てきたキーワード（6位～8位）を見ると、「良い」（161回）、「聞く」（123回）、「見る」（102回）であった。出現回数リストを見渡してみると、「声」に関わること、「絵本」の持ち方や選定、「ページ」、「読む」速さなど表現技術に関わるキーワードが多いことが読み取れる。

（2）キーワードの分類と繋がりからの考察

共起ネットワーク分析により、図1のような結果が得られた（破線による囲い込みは筆者によるもの）。キーワード間の関連性と傾向を検討するために色別にグルーピングを試みた結果、次の6群に分けることができた。

表 1. 観察記録シートのコメントから抽出された頻出語リスト（上位50語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
声	292	聞き取る	48	指さす	31	見える	22
絵本	289	大きい	47	分かる	31	合う	22
思う	282	導入	47	変える	31	聞こえる	22
読む	230	言う	42	スムーズ	30	もう少し	21
子ども	215	上手	41	内容	29	眠い	21
良い	161	落ち着く	38	持つ	27	面白い	21
聞く	123	一緒	36	少し	27	抑揚	21
見る	102	表情	36	感情	25	感じる	20
楽しい	82	読み方	35	質問	25	気持ち	20
トーン	79	言葉	34	優しい	25	見せる	20
ページ	70	問いかける	34	反応	23	次	20
前	60	最後	32	明るい	23		
スピード	50	絵	31	セリフ	22		

【1】絵本の読み聞かせに関する総括的考察群

出現回数で上位にあったキーワードである「絵本」「思う」「読む」「子ども」「良い」「聞く」「楽しい」等の単語がまとまった群である。「絵本の読み聞かせ」における選書や、想定される子どもとの関わり方など、読み方やその印象に関する内容のものが結びついている。

「思う」が頻出した理由は、読み聞かせの模擬保育を受けて、そこからの学びや感想を述べたり、実践とねらいの関係について考察したりした結果として、「～と思う（思った）」という表記が多かったためである。また、「絵本」の読み方に関しては、絵本の内容を挙げて「楽しかった」という聞き手としての感想や、実際に保育現場で読み聞かせが行われた場合には「子ども」が「楽しめそう」であると言った子どもの姿を想像した感想が見られた。模擬保育を通して、保育現場における子どもの姿を想像・想定し、実践に結びつけようとする思考の萌芽が見られる。なお、批判的な内容はほとんど見られず、良かった点を中心に述べられることが多いことも特徴であった。

この群においては、絵本の読み方に関しての記述との結びつきが多く見られた。例えば、「スピード」や「間の取り方」、「抑揚」などである。読み聞かせにおいて、それらの聴覚的要素があることにより「聞きやすい」という感想が見られた。

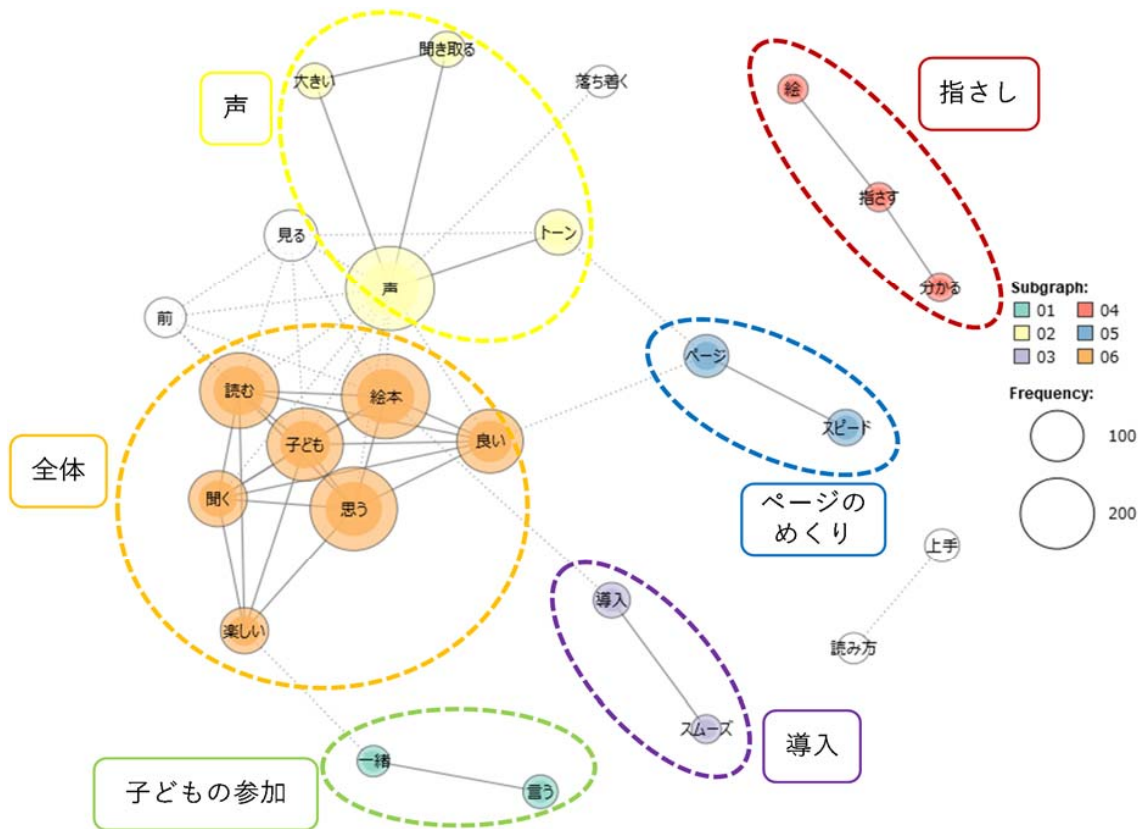
【2】音声群

出現回数で上位にあった「声」、中位にある「大きい」「聞き取る」「トーン」等の単語がまとまった群である。読み聞かせの聴覚的な要素である音声に関する気づきと学びに関する内容のものが結びついている。

主に絵と言葉で表現される絵本の読み聞かせにおいて、言語表現などの聴覚的要素は、視覚的要素と共に、その実践の要点に大きな位置を占める。本群は、絵本の読み聞かせの聴覚的要素に関する学生の学びの内容のまとまりである。本研究において、聞き手が、「声」の「トーン」や強弱、速さ、「大きさ」などが「聞き取りやすい」かどうか、また絵本の内容に合っているかどうかといった「声」及び「聴覚的要素」に関わる視点から気づきや学びを多数記録していることが把握された。その背景には、「声」及び「聴覚的要素」に関わる視点の分かりやすさが挙げられる。子ども役で模擬保育を見る際にも、学生にとって「声」の大きさや強弱、「トーン」、「聞き取りやすさ」などは最も分かりやすい視点であり、学びの視点になりやすいと考えられる。

【3】指さし群

出現回数で中位にあった「絵」「指さす」「分かる」等の単語がまとまった群である。先述した聴覚的要素に加えて、絵本の読み聞かせの実践に重要なものが視覚的要素である。本群は、その中でも絵本に描かれた要素を指で指し示し、読み手が聞き手に分かりやすく示す行為である「指さし」に関する



(N25,E50,D.167)

図1. 「気づき・学び・アドバイス」のコメントから得られた共起ネットワーク

る内容のものが結びついている。

読む時に「絵」を「指さし」することにより、聞き手にとって「分かりやすい」という視点である。絵の大きさや場面により、効果的な「指さし」は、学生にとって学びの視点になると考えられる。

【4】 ページのめくり群

出現回数で上位にあった「ページ」「スピード」等の単語がまとまった群である。絵本は時間的・空間的な変化を表現できる文化財であり、それを実現するのが「めくり」である。ページをめくことで時間の経過や空間の変化を表現し、物語を描き出すことができる。物語の展開に合わせて、ゆっくりめくるのか、素早くめくるのか、また言葉と合わせてめくるのかなど、そのやり方によって聞き手にもたらす絵本の読み聞かせの印象は異なるものになる。本群は、そのめくりに関する内容のものが結びついている。

具体的には「ページ」のめくりに関わって、タイミングや「スピード」が適しているかどうかといった視点が挙げられる。読み手の学生の中には、物語を覚えてセリフを言いながら前後のページをめくっている学生や、場面の展開に合わせて「ページ」をめくる「スピード」を調整している学生もいた。ねらいに基づいた「ページ」のめくりが行われていることは、学生にとって学びの視点になると考えられる。

【5】 導入群

出現回数で中位にあった「導入」「スムーズ」等の単語がまとまった群である。保育は様々な活動が連続する営みであり、保育者はその全体像を構想・構成し、一つ一つの保育活動をつなぐことが求められる。「絵本の読み聞かせ」においても同様であり、いきなり絵本を持ち出して始まるものではない。読み聞かせに適した環境構成を行い、子どもを集め、絵本を提示し、その内容に対する乳幼児の興味や関心を喚起し、期待をもってその内容を楽しめるように語りかける、あるいは集中させるための手遊びを行うなどの「導入」が重要である。本群は、この導入に関する内容のものが結びついて

いる。

読み聞かせの「導入」が「スムーズ」であるかどうかの視点である。「導入」が応答的であったり、「絵本」の内容に関わるものであったり、読み聞かせで注目してほしいポイントを事前に伝えることは、子ども役で見ていた学生にとって学びの視点となると考えられる。

【6】子どもの参加群

出現回数で中位にあった「一緒」「言う」等の単語がまとまった群である。「絵本の読み聞かせ」は絵本の内容や、読み聞かせの目的、子どもの興味・関心、読み聞かせ前後の保育展開等に応じて、様々な読み方で行われるものである。したがって、保育者に求められる絵本の読み聞かせに関する専門性の一つとして、子ども・保育・絵本に応じて、多様な読み方から最適なものを選択する能力が挙げられる。読み方の一つとして、読み手と聞き手が応答的にやりとりをしたり、絵本の展開に子どもの声や反応を取り入れたりするものがある。本群は、子どもが読み聞かせに参加するような読み方に対する内容が結びついている。

子どもと一緒にセリフや擬音語を言うような参加を促す読み方やクイズのような内容の絵本は、子どもが参加しながら展開する応答的な読み聞かせとなる。そのような「絵本の読み聞かせ」は学生の学びの視点となると考えられる。

以上2つの分析結果から、学生は、全体として浅野（2016）が指摘する「絵本の読み聞かせ」の表現技術に関する学びの視点を備えていることが分かった。第2章（4）で見たように、子どもが絵本に親しんだり、想像する楽しさを味わったり、心を通わせるような読み聞かせを行うためには、「絵本の読み聞かせ」に関する保育者の表現技術が必要である。滝浪（2022）と山田（2017）の指摘においても、学生は読み聞かせを実践することによって、その意義や表現技法の難しさ、選書の大切さに気付いていると述べている。

しかし、表現技術に関する視点を有するだけでは不十分である。これは、学生が「保育内容（言葉）」は履修済みであるものの、「保育内容（言葉）の指導法」を学び始めた4月段階であることや、実習等現場で子どもや保育者の姿を実際に観察する経験の少なさも影響していると考えられる。模擬保育を見る視点は、そのまま学生自身が模擬保育を行う際に注意して行う視点であるともいえる。やはり、実践することで視点が広がっていくと考えるが、その機会は限られている。他の学生の模擬保育を同じ視点で見続けるだけでは、学びは深まっていけない。「絵本」や「絵本の読み聞かせ」に関する知識や技術だけでなく、保育における位置づけや保育内容としての構想の仕方、展開の方法などを学んでいく必要があることは、先述した通りであり、重要であることが本研究を通して明らかとなった。今後、学生は「保育内容（言葉）の指導法」だけでなく、他科目でも保育に関する学びを深めていく必要がある。

7. まとめと今後の課題及び展望

本研究では、筆者が担当している「保育内容（言葉）の指導法」で実施している学生による「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学生の学びの視点について考察を行ってきた。その結果、本調査の対象となった学生の観察記録シートへの記述を基に、分析した結果、キーワード間の関連性と傾向を6群に分けることができた。ここで得られた6群は、学生が「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学びの視点とすることができ、「1. 絵本の読み聞かせに関する総括的考察に関する視点」、「2. 音声に関する視点」、「3. 指さしに関する視点」、「4. ページのめくりに関する視点」、「5. 導入に関する視点」、「6. 子どもの参加に関する視点」の6つの視点から模擬保育を見ていることが明らかになった。「保育内容（言葉）の指導法」における指導当初（4月時点）では、「絵本の読み聞かせ」の表現技術に関する視点がほとんどであることが分かった。先述したように、「絵本の読み聞かせ」の表現技術に関する視点は重要な要素であり、学生が表現技術に関する学びの視点を備えていることが明らかとなった。しかし、「絵本の読み聞かせ」の表現技術に関する視点にとどまらず、保育活動

全体へと視野が広がることが求められる。

今後の課題として、模擬保育に対して、良さだけでなくアドバイスをする意識を喚起していくことが挙げられる。他学生の模擬保育を観察したり、自身が実施したりすることにより、視点が広がっていった際に、模擬保育を批判的な視点でも見ることで学びは深まっていくと考えられる。今後は、「保育内容（言葉）の指導法」や他科目を通して、学生の学びが深まっていくことによる視点の広がりを期待したい。「保育内容（言葉）の指導法」では、『保育所保育指針』や保育の展開などを踏まえて、子どもの姿を想起させながら授業を展開していく。授業の後半では、自身が行った模擬保育を基に、他学生の模擬保育からの学びも踏まえて「絵本の読み聞かせ」の指導案を作成する内容も予定している。山田（2017）が指摘するように、「4、絵本を子どもと一緒に楽しむ感性をもつ」ことができるよう指導していく必要がある。学生の模擬保育に対する学びの視点が、今後どのように変化していくか今後の研究につなげていきたい。

引用・参考文献

- 浅野泰昌（2016）「保育における絵本の読み聞かせの要点」『くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要』第49巻第2号，pp. 121-125
- 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）「教職課程コアカリキュラム」，https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf
- 厚生労働省（2017）『保育所保育指針』フレーベル館。
- 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』フレーベル館。
- 全国保育士養成協議会（2018）「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について[改正後全文]」，https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/30-2sl.pdf
- 滝浪常雄（2022）「幼稚園教員養成段階で読み聞かせを学ぶことに関する一考察—保育内容指導法演習（言葉・環境）の実践から—」『名古屋学院大学教職センター年報』第6号，pp. 9-16
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館。
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館。
- 樋口耕一（2014）「KH Coder」Ver: 3.Beta.05
- 保育教諭養成課程研究会（2018）「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—」，https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm
- 松居直（2003）『絵本のよこび』NHK出版。
- 文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』フレーベル館。
- 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館。
- 山田秀江（2017）「『絵本の読み聞かせ』に関する一考察—学生の読み聞かせ体験の実態調査より—」『四條畷学園短期大学紀要』第50号，pp. 38-47

